

ふるさとポケットガイドブック

シリーズ②

上武佐ハリストス正教会



ご案内します。どこより素敵なたたしたちのふるさと。

スケールの大きな自然で知られる根釧台地は、その地理的条件、歴史的役割のうえに独特の文化、情緒をはぐくんできました。歴史、伝統、そして人情も、実に味わい深い土地柄です。この魅力を少しずつでもかたちにしたいと、本シリーズの企画・制作をスタートさせました。名所を巡りながら、力強く生きる人々の営み、思いに触れていただくガイドブックです。地元の方には、もう一度ふるさとに会い、また好きになるきっかけに、旅の方には、発見と感動への水先案内人となることを願って。

大地みらい信用金庫
創立100周年記念事業実行委員会

大地みらい基金
設立30周年記念事業実行委員会

～ふるさとの記憶をみらいへつなぐ～

INDEX

上武佐ハリストス正教会…………… 03

観る イコン (Εἰκών | Икона | Icon)
「十二大祭図」と「ハリストス復活」 05

描く 描いた画家の人生もドラマチック
日本で初めてのイコン画家
山下りん
画家になるため、家出も…………… 11
正教会入信、ロシアへ…………… 12
迷い、そしてイコン…………… 12

祈る 1世紀変わらないもの
厳しい開拓を支えた祈り…………… 13
現在の教会は三代目…………… 14
まちで最初の保育所も…………… 14

右手首の欠けたキリスト像…………… 15
1世紀変わらぬ祈りのかたち…………… 17
守りたいもの、伝えたいもの…………… 18

もんべの花嫁…………… 19
輝きは心の表れ…………… 20

巡る 武佐めぐり
鉄道ファンならずとも…………… 22
終戦間際には「熊部隊」が…………… 23

上武佐市街図 (大正七年)…………… 24
「武佐」百年のあゆみより

根釧エリアマップ…………… 25

根室中標津空港から北東へ、車でおよそ10分、
徐々に深さを増す緑の中に市街地の名残をみつけたら
ハリストス正教会はすぐ近くです。
大正5年(1916)にともされた祈りの灯と共に
日本最初の聖像画家・山下りん作のイコン(聖像画)を
守り続ける、美術愛好家にも名を知られる教会です。



十字架を頂き、鐘楼を備えた教会。正教会独自の十字架ロシアン・クロスの上の短い横棒はハリストス(キリスト)が張り付けにされた「罪状札」、下の横棒は「足台」で、傾きはハリストスの左右で十字架に掛けられた2盗賊のうち1人が悔い改めて天国を約束されたことを想起させるためです。

上武佐ハリストス正教会

北海道標津郡中標津町字武佐南9線西1番地
(地元信徒が教会を管理していますが、常駐者はいません)

●見学申し込み/問合せ
「釧路ハリストス正教会」TEL:0154(41)6857
※見学は信仰を尊重し、マナーを守って。



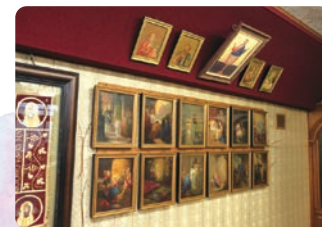
ハリストス復活

「十二大祭図」と「ハリストス復活」

正教会において重要な12の祝祭の起源となる出来事が描かれたイコン。壁に並ぶ「十二大祭図」と「ハリストス復活」は、それぞれの祭日に合わせて信徒の手によって正面に移動されます。

上武佐ハリストス正教会では日本初のイコン画家・山下りんが描いたイコンを合計15点見ることができます。小型の「ハリストス復活」と「十二大祭図」、そして正面の王門の両脇にある全身像「ハリストス(キリスト)」「至聖生神女(マリア)」。

1世紀にわたり信徒の祈りを受け止めてきたイコンです。



イコンとは？

イコンはギリシャ語でエイコーン、もともとは「写し」「似姿」の意、キリストや聖母マリア、聖人の肖像画で、正教会の祈りの対象です。イコンは地上と天国との間にある窓、神の国を映す鏡とされます。



至聖生神女之福音
(十二大祭図)



ハリストス降誕
(十二大祭図)

上武佐ハリストス正教会にある十二大祭図は、
山下りんが描いた同じ図柄のイコンの中でも細かな筆致で描き込まれ、
明暗の対比も強調されていることが特徴とされます。

「古い建物のころはまきストーブやろうそくのすすでイコンを汚してはいけないと真冬でも礼拝中は窓を開けておくことがあった」といいます。



主之顕栄
(十二大祭図)



主之入城
(十二大祭図)



主之迎接
(十二大祭図)



主之洗礼
(十二大祭図)



聖架之挙栄
(十二大祭図)



主之昇天
(十二大祭図)

神の肖像を描くイコン画家に要求されるのは正確さであり、画家自身の個性や創意が入り込む余地はないとされます。そのため署名も年記もなく、無名性、無時代性が大きな特徴です。



イコンスタス(イコンの壁)の王門両脇「ハリストス(キリスト)」 「至聖生神女(マリア)」も山下りんの作。



聖神降臨
(十二大祭図)



至聖生神女之就寢
(十二大祭図)



至聖生神女誕生
(十二大祭図)



至聖生神女之進堂
(十二大祭図)



山下 りん

日本で初めてのイコン画家

女子留學生が極めて珍しかった明治期、単身ロシアに留学し、イコンを学んだ山下りん。描き手の個性、感情、自己表現、一切を排除する極めてストイックな絵画・イコンとは対照的に、その人生は激しいほど人間味にあふれたものでした。

画家になるため、家出も

山下りんは1857年(安政4)常陸国笠間藩(現:茨城県)に生まれました。幼い頃から絵を好み、15歳で「ここにはよい先生がない」と上京のため家出、このときは連れ戻されたものの翌年には家族を説き伏せて上京しました。東京では浮世絵師、日本画家の家数か所に弟子として住み

込んだものの、弟子とは名ばかり、家事労働の日々に失望、当時最新の絵であった西洋画を志すようになります。そして1877年(明治10)、日本初の公立美術学校「工部美術学校」に入学、日本の美術学校で学ぶ女子学生第1号の一人となりました。

正教会入信、ロシアへ

美術学校では女子学生の中でもトップの成績を誇ったりんは友人の勧めで洗礼を受け、日本のハリストス正教布教の祖であるニコライに見込まれて日本人で初めてロシアでイコン画を学ぶ留學生に抜擢されます。りんのイメージするロシアは西洋画の本場ヨーロッパの一部だったでしょう。イタリアをはじめとするヨーロッパの近代絵画を学ぶめったにないチャンスと、りんは希望に燃えロシアの修道院での生活を始めました。しかしその期待とは裏腹に、待っていたのはギ

リシャ画イコンの忠実な模写を求められる毎日、さらには修道女との軋轢もあり、5年の予定だった留学を2年で切り上げ、失意のうちに帰国しました。



ロシア留學生時代に描いたスケッチ画

迷い、そしてイコン

明治期の女性としては類まれなる行動力を発揮しながらも、りんの画家としての生き方の模索は帰国後も続きます。イコンを再び描くようになったのは帰国

せんが、神田駿河台のニコライ堂に設けられたアトリエで、日本各地に建てられる正教会のためにイコンを描き続けました。60代で白内障のために筆をおくまで、描いた図柄は70以上、総数300点といわれます。画家の自己表現も署名も許されないイコンは、描き手が誰か見極めるのは容易ではありませんが、りんの手によるイコンには、厳しい制約の中にも、温かく伝わりんならではの筆致があるといわれます。それゆえに、聖像として1世紀にわたり信徒の祈りを受け止めながら、同時に美術的な価値も見出されているのです。



十二大祭図「至聖生神女之福音」(本文6ページ)下絵

厳しい開拓を支えた祈り

上武佐ハリストス正教会のある武佐地区は中標津でもいちばん早くに入植が始まった場所です。1913年(大正2)、武佐岳を望む、巨木と笹が生い茂る原生林に開拓の鋤が入りました。教会の始まりはその3年後、武佐駅通所が開設されたときです。ハリストス正教会の熱心な信徒であった駅通所取扱人の伊藤繁喜氏が駅通所を集会所として開放し、正教会の灯がともされました。現在の信徒は、大自然の中に分け入り手作業で農地を開き、命がけて冬を越す苦難を、共に祈ることで乗り越えた開拓者の子孫です。

素朴な
疑問

ハリストス正教会

カトリック、プロテスタントと並ぶキリスト教の三大教派の一つ、東方正教会のことで、「ロシア正教」「ギリシャ正教」とも呼ばれます。カトリック、プロテスタントの教会が西ヨーロッパを中心に広がったのに対し、ハリストス正教会はキリス

ト教が生まれた中近東を中心にギリシャ、東欧からロシアへ広がりました。日本最初の正教会は、幕末1860年(安政7)に建てられた函館ハリストス正教会です。イエス・キリストは日本正教会訳では「イイス・ハリストス」となります。

現在の教会は三代目

武佐駅通所に集まり祈りを捧げる信徒にとって念願の教会建設は1919年(大正8)に叶いました。当時の信徒戸数は15戸、決して多くはありませんが、信徒の一人が寄贈した土地に、開拓地から切り出した木を使い信徒の惜しみない労働奉仕で31坪の教会が完成しました。立て替えられたのは1951年(昭和26)。二代目は尖塔を備えた現在の教会とほぼ同じデザイン、信徒の設計で釧路の大工により建てられました。初代同様、木材の献納、労働奉仕、牛や馬を売っての資金調達など信徒の厚い信仰心が建設を支えました。

現在の教会は三代目、1978年(昭和53)に完成しています。先人の苦労を忘れないよう二代目のデザインを踏襲しつつ、尖塔は大きな鐘を抱く鐘楼となりました。



一代目



二代目



三代目(現在)

まちで最初の保育所も

信徒の生活と共に歩んできた上武佐ハリストス正教会は、産業振興にも一役買っていました。1942年(昭和17)には猫の手も借りたい農繁期に子どもを預けられる季節保育所を開設、これは中標津町(当時は標津町)で初めての託児施設でした。ま

た、家畜の少ない時代には乳牛や耕馬の貸付制度もありました。農家は教会の牛を借り、子牛が生まれると教会に返し、親牛の牛乳が収入になるという仕組みです。こうして増えた牛は二代目の教会を新築する際の資金面の助けにもなりました。



右手首の 欠けた キリスト像

聖堂に入って正面、イコンスタス（縦長のイコンが並ぶイコンの壁）中央の王門に小さな像が掲げられています。高さ10センチほど、金色に塗られたブロンズ製のキリスト像は、北方領土・色丹島のハリストス正教会にあった装飾の一部とされています。

戦後、ソ連軍に島を追われる際、

信徒の一人（山口さん）が急いで持ち出し、サハリン経由の引き揚げの道中、肌身離さず守り通したといいます。そしてたどり着いたのが上武佐ハリストス正教会。十字架からあわてて引きはがされたためにちぎれてしまったキリストの右手首が、歴史に翻弄された北方領土元島民の困難な人生を静かに伝えています。



1世紀変わらないもの



1世紀変わらぬ祈りのかたち

上武佐ハリストス正教会の礼拝は車で2時間半の距離にある釧路市からやってくる司祭により執り行われます。正教会では無理がない限り礼拝は起立で行われるため聖堂に長椅子は並んでいません。

信徒によりろうそくに火がともされ、玄関真上の鐘が鳴らされると礼拝の始まりです。エピタラヒリ(首から下げる長い布)とフェロン(マント状の祭服)



をまとった司祭は、鎖についた乳香を炊く香炉を振り鳴らしながら読経をメロディーに乗せ聖堂内を歩きます。続いて信徒がソプラノで歌う厳かな聖歌。正教会の礼拝はとても音楽的です。楽器は一切使用せず、神への賛美、聖書の言葉などすべてが美しいメロディーに乗せられた歌となるのです。



守りたいもの、伝えたいもの

変わらないのは祈りのかたちだけではありません。聖堂の隣に大きな台所と和室を備えた教会はいまも人が集う場、人を受け入れる場です。礼拝の後はお茶や軽食のひとつ。見学者もまるで親族の集まりのようなぬくもりで包み込まれます。

「この教会は、開拓者が見知らぬ大地でどう生きていけばよいか、導きを求めた場所です。よい生き方、美しい生き方、幸せをを求める場として100年守られ、地域の歴史に足跡を刻んで

きました。建物やアイコンと共に、次の世代に何を残し何を伝えていきたいか、これからも問い続けたいと思います」(司祭：内田圭一)



共に祈り
育て合う強い絆に
感謝します。

村上 道子さん



1971年(昭和46)から2013年(平成25)の42年にわたり上武佐ハリストス正教会の敷地内に住み教会の管理を担った村上さん。同教会と共に時代の変遷を見続けてきた信徒の一人です。



もんぺの花嫁



「父は秋田出身で大正7年に上武佐に入植しました。両親ときょうだい5人、一家でこの教会で洗礼を受けたのは昭和6年、わたしが小学3年生のときです。当時は毎週土曜夜に礼拝があり、大人たちは礼拝後遅くまで開拓の進み具合などを話し込んでいました。遊び疲れて眠い目をこすりながら、子ども心にも、大人にとって情報交換し励まし支え合う大切な場であることがわかりました。子どもたちも教会に行くのは大きな楽しみでした。この辺りは

開拓住宅、商店が立ち並びにぎやかで、武佐小学校には300人もの児童がいましたね。

結婚式もこの教会で挙げました。戦時中でしたから、主人は国民服で、わたしはもんぺ姿の花嫁でした。

戦後は、北方領土を追われた信徒がこの教会に身を寄せた時期もあります。家を建てるのを手伝ったり、一緒に農作業もしました。ソ連崩壊後は北方領土に住むロシア人がビザなし渡航で洗礼を受けに立ち寄るケースもけっこうありました。」

輝きは心の表れ

「42年ほど隣の住宅に住み、主人(伝教者・村上賢次さん/故人)と一緒に教会を管理し、訪れる方のお世話をしました。主人の口癖は「汚れる前に」。燭台ははじめ教会内のすべてが常に磨き上げられた状態を保つよう努めました。いまでも古くはあっても汚れたものはないでしょう？教会内をきれいに保つことは、わたしたちの心の表れ、生活の表れだと思っています。

いまは上武佐地区の人口も、信徒も



少なくなりましたが、わたしの人生からこの教会を切り離すことはできません。にぎやかだった頃と何ら変わらない絆の強さは掛け替えのないもの。ここで結ばれた固い絆に、感謝しています。」

上武佐ハリストス正教会のあゆみ

- 1913年(大正2) 武佐地区入植始まる。
- 1916年(大正5) 武佐駅通所開設。熱心な正教会信者であった取扱人・伊藤繁喜氏が同駅通を教会の集会所とする。
- 1918年(大正7) 武佐地区に拓殖医配置。
- 1919年(大正8) 初代教会建設。信者が入植地の木材を切り、手作りで建てた約31坪。
- 1923年(大正12) 武佐地区と開陽地区に乳牛導入。
- 1927年(昭和2) 武佐駅通、上武佐から武佐中央市街へ移転。
- 1931年(昭和6) 武佐駅通所廃止。武佐地区に電灯が引かれる。釧網線全線開通。
- 1934年(昭和9) 中標津駅開設。厚床線開通。
- 1937年(昭和12) 国鉄標津線全線開通。上武佐駅開設。
- 1942年(昭和17) 季節保育所開設。標津村(当時)初の託児施設。
- 1951年(昭和26) 二代目教会建設。塔を備えた木造平屋建て約23坪。
- 1970年(昭和45) 敷地内に住宅建設(司祭館)。初めての司祭常駐(1年のみ)。
- 1973年(昭和48) 納骨堂建設。
- 1978年(昭和53) 三代目教会建設(現在)。正面に鐘楼を設けた約50坪。
- 1986年(昭和61) 開教70周年記念式典。

ちょっと足を
延ばして

武佐(むさ)めぐり

目に入るのは深い森、
牧草地や畑、まっすぐに延びる道。
少しだけ歴史を知ると、
牧歌的風景の武佐めぐりは
さらに味わい深いものになります。



どこまでも続く一本の道



武佐神社



正伝寺と馬頭観音



転車台

鉄道ファンならずとも

大正初期の中標津町(当時は標津村)開拓は武佐地区一円から始まりました。開拓が進み形成された市街地は2つ。ハリストス正教会のある上武佐と、そこから3kmほど西に入った中央武佐です。武佐のにぎわいはこの2つのエリアを行ったり来たりしましたが、そこには他にはない北海道独特の交通手段が関わっていました。

最初はハリストス正教会の集会所ともなった1916年(大正5)上武佐に開設された武佐駅通所です。駅通所は、人馬を備えて宿泊と運送の便を図り開拓を支えた施設。武佐駅通所ができる上武佐の区画割された住

宅地には競うように30戸以上の家が建てられ、商店ができ、拓殖医も配置されました。ところが10年後の1926年(大正15)、簡易鉄路・殖民軌道が中央武佐を通って標津～中標津間に敷設され、翌年には駅通も中央武佐に移転、駅通が新築された中央武佐が市街地として発展します。しかしさらに11年後の1937年(昭和12)、国鉄標津線が上武佐を通るルートで開通。上武佐駅は映画のロケ地にもなり、上武佐のにぎわいが戻りました。標津線は1989年(平成元)廃線となり、現在、駅跡地は観光スポットになっています。



映画口ケ地跡

地名「武佐(むさ)」はどこから?

アイヌ語のイラクサ「モサ」が由来という説、アイヌ民族が儀式で神をまつる木幣「ヌサ」が転じたという説、諸説あります。

終戦間際には「熊部隊」が

本土決戦の可能性が高まった1945年(昭和20)5月頃、旭川第七師団の秘密部隊が武佐岳中腹に向かいました。「熊部隊」と呼ばれた約600名の同部隊は、本部を中央武佐市街に、経理隊を上武佐駅前の土田旅館に置き、米軍の標津海岸上陸を想定した山砲の陣地構築を始めます。山腹に穴を掘りセメントで固め、木で

枠組みし、上武佐駅から馬にひかせて運んだ組み立て式山砲を設置したのです。結局、山砲で米軍を迎え撃つことなく終戦を迎えましたが、国内最強といわれた第七師団も当時は火砲や弾薬の備蓄はわずか、米軍が上陸したなら一会戦で弾薬は底をついたであろうといわれています。

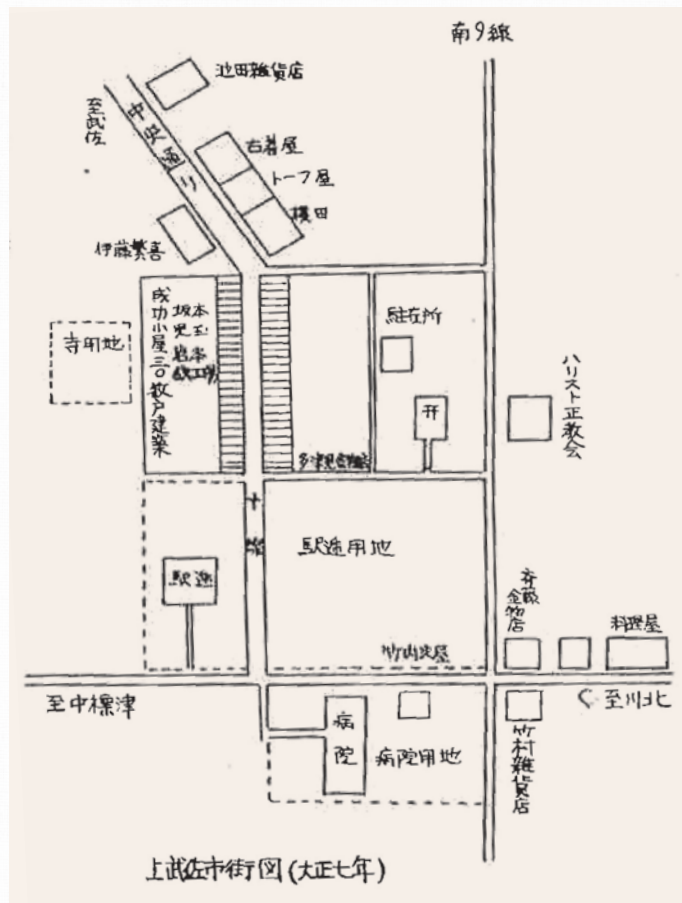
●北村家住宅(旧土田旅館)

1927年(昭和2)武佐駅通所として建てられ、後に上武佐駅前に移築、旅館として使われました。現在は個人の住宅。2007年(平成19)国の登録有形文化財指定を受けました。大きな映画口ケ地看板が目印です。



上武佐市街図(大正七年)

武佐地区開基百年記念誌「武佐」百年のあゆみより



上武佐市街図(大正七年)



正伝寺
 1920年(大正9)より61年続いた曹洞宗の寺院。1981年(昭和56)焼却供養され歴史の幕を閉じたが、2003年(平成15)現在の小さなお堂が建立された。お堂に並んで「馬頭観世音碑」がある。



武佐簡易郵便局
 レンガづくりが目を引く郵便局。かつて栄えた中央武佐の中心部はこの交差点あたり。



武佐神社
 1916年(大正5)建立。



開陽台



ミルクロード



上武佐ハリストス正教会



中標津町郷土館〈緑ヶ丘分館〉



上武佐神社



転車台

武佐神社境内にある「転車台」は殖民軌道の名残。ガソリンカーを方向転換させる土台で、1929~1937年(昭和4~12)の間使用された。



旧土田旅館

1927年(昭和2)築。国の登録有形文化財。



映画ロケ地看板

建立は1922年(大正11)頃といわれている。社殿に向かい右に「牛頭天王馬頭観世音碑」が立つ。

1928年(昭和3)建設。2009年(平成21)に国の登録有形文化財に登録。



格子状防風林

2016年3月発行

 **大地みらい 信用金庫**

〒087-8650 北海道根室市梅ヶ枝町3丁目15番地
TEL (0153) 24-4101

一般社団法人

**大地みらい
基金**

TEL (0153) 24-4104